

# “人間ドック”からみた老人性変化について

東京女子医科大学三神内科 (主任 三神美和教授)

三 神 美 和・小 山 千 代・大 久 保 つ る  
ミ カミ ミ フ コ ヤマ チ ヨ オオ ク ホ

阿 久 津 初 枝・小 林 成 子・久 保 か 彌 子  
ア ク ツ ハツ エ コ バヤシ シゲ コ ク ホ ネ コ

(受付 昭和 35年 3月 31日)

## I 緒 言

近年における老人病学の発達には種々の新しい薬剤、診断技術の目覚ましい進展に伴い著しいものがある。ことに最近のいわゆる“人間ドック”の普及は老人病学の良き基盤となり、その成績は貴重な資料として各分野より検討されている。一般に老年期にみられる種々の変化はいわゆる退行変性に基因するものが主である。L. Aschoff は老年性変化と老年性病変を区別しそれらが Altersgebrechen (老いの障ひ) と Alterskrankheit (老いの病い) を起す原因であるとのべている。しかしこれらは互いに移行し得るものであり密接な関連を有しておるがその区別は、はなはだ困難である。われわれはそれら両変化を一括して老人性変化として扱い“人間ドック”の立場より各年代別による変化の成績を集計した。昭和30年7月から同34年3月迄に三神、中山両内科において扱ったドック入院患者 408 例の総合検査について老人性変化を主体として種々検討し若干の知見をえたので報告する。

## II 検査方法

入院期間は6日間で検査項目は第1表にしめすごとくである。なおこれらは必要に応じて再検査又は精密検査を行つた。

### III 年令構成および男女比

被検者の最高年令は72才、最低年令は21才で総被検者数 408 名、男女比は3.5:1である。被検者の年令分布は第2表の如く50才代が最も多く151名(37.0%) ついで60才代101名(25.0%)のごとく50才代、60才代が大半をしめ、ついで40才代、40才以下となっている。

### IV 社会的地位及び職業

ほとんどが比較的恵まれた生活環境にあるもので中小企業経営者が最も多くついで会社重役などで無職のものは女子に僅かにみられた。

## V 検査成績

### 1. 循環器系

血圧、心電図、心及び血管系レ線像及び脈管系の変化として眼底所見及び血清コレステロール値について検討した。

#### a 血 圧

最高血圧 160mmHg 以上、最低血圧 90mmHg 以上をしめすものは図1にしめすごとくで年令と共に増加をしめしており50才代を境に高値をしめしている。又年令別による最高血圧分布をみると図2, a, b, にしめすごとく 150mmHg~160mmHg にあるものは39才以下では1.9%であるが40才代では9.0%, 50才代では11.3%と高くなっており40才代より50才代にかけて高血圧患者の増加がみられる。

#### b. 心電図所見

被検者 408 例中、異常例は32.8%でその中最も多いものが心筋障害14.1%, 左室肥大5.5%, 脚ブロック4.9%, 冠不全2.8%などで第3表にしめすごとくである。これを年令別にみると心筋障害には著明な年令別差異は認められないが左室肥大が40才代より年令と共に増加している(図3)。

#### c. 心及び血管系レ線像

被検者数 433 例中異常例 51.5%でその中、心拡大26.3%, 動脈硬化21.0%で大部分をしめ大動脈瘤は僅か3.0%みられたのみである。これらを年令別にみるといづれも40才以上のものではそれ以下のものに比べて約2倍以上の高率をしめしている。(第4表参照)

#### d. 眼 底 所 見

被検者 408 例中 Keith-Wagener 分類第Ⅱ度のものは30.1%で60才代では49例約50.0%であり約過半数をしめしている。すなわち40才代より年令と共に増加をしめしている。(第5表参照)

Miwa MIKAMI, Tiyo KOYAMA, Turu OKUBO, Hatsue AKUTU, Shigeko KOBAYASHI & Kaneko KUBO (Mikami Clinic, Department of Internal Medicine, Tokyo Women's Medical College):  
Geriatric changes on the somatoscopic subjects.

第1表 ドック入院患者検査項目

	午 前	午 後
第 1 日 (月)	1. 既往歴, 現症 2. 身長, 坐高, 胸囲, 体重測定 3. 外科, 4. 肺活量, 血圧 5. 耳染採血 (出血時間, 血液型) 6. 癌反応, 血沈	1. 内科診察 2. 婦人科 3. 整形外科
第 2 日 (火)	1. 十二指腸液検査 2. 血圧 (三位) 3. 喀痰検査 4. ヲ氏その他血清化学的検査 5. 検尿	1. 泌尿器科 2. 歯科口腔外科 3. 心電図, 血圧 4. 皮膚科 5. 精神神経科
第 3 日 (水)	1. 基礎代謝 2. 胸部 X線透視及び撮影 3. 胃透視及び撮影 4. ツメルクリン反応 5. 検便 6. フィッシュバーグ尿濃縮試験	1. 眼科 眼底所見及び眼底血圧
第 4 日 (木)	1. 胃液検査 (T. B 菌培養) 2. 脳波検査 3. 検便 4. 凝固時間測定	1. 耳鼻咽喉科 2. P. S. P 3. マスター氏運動負荷試験
第 5 日 (金)	1. 血糖検査 2. 血圧 3. ルンベルレーデ紫斑計	1. 血圧
第 6 日 (土)	1. B. S. P	1. 判定

第2表 ドック入院患者年齢分布

年 令	性 別		計
	男	女	
20~39	36	17	53
40~49	74	15	89
50~59	114	37	151
60~69	82	19	101
70~	11	3	14
計	317	91	408

## e. 血清コレステロール値

血清コレステロール値 240mg/dl 以上のものが40才代以下19.0%, 40才代23.0%, 50才代30.0%, 60才代50.0%, 70才代46.0%で年齢と共に増加し60才代以上では特に高率をしめしている。

## 2. 腎機能及び尿所見

## a. 濃縮試験 (Fishberg 氏)

比重1022以上を正常としたが50才代, 60才代のものに若干の異常を認めただのみで年齢的差異は殆んど認められなかった。

## b. 色素排泄試験 (P. S. P.)

120分60.0%以下のものは36例9.8%で40才以下では11例20.0%, 70才代は7.7%でその他はいずれも14.0~15.0%内外であり年齢別差異はほとんどみられなかった。

## c. 残余窒素 (N. P. N)

N. P. N 41mg/dl 以上のものは70才代に15.4%をしめし, その他にも若干の異常は認められたが有意の差異は認められなかった。

## d. 尿所見

尿蛋白の出現率は平均9.8%で70才代が28.5%の高率をしめしその他の年代にも5~10%の異常例を認めた。尿糖陽性のものは平均3.4%で50才代に4.6%認められた

がその他は比較的低率である。

3. 呼吸器系

胸部レ線像を中心とし肺活量、喀痰検査及びツベルクリン反応について検討した。

a. 胸部レ線像

異常例は33.1%で最も多いものは硬化型肺結核10.0%、肋膜癒着及び肥厚10.3%、ついで浸潤乾酪型肺結核

図1 収縮期圧 160mmHg 以上  
拡張期圧 90mmHg 以上の年令的分布

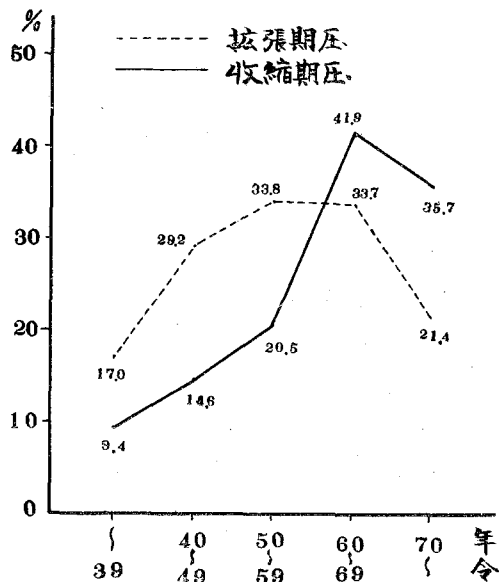
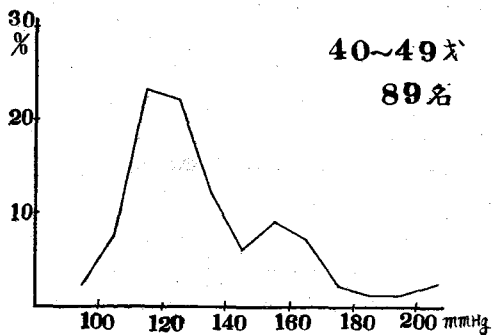
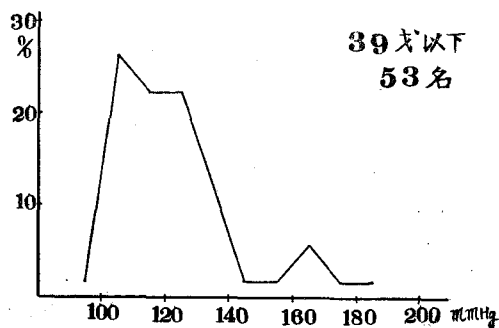


図2. a 年令別最高血圧分布



第3表 心電図所見 (百分率)

項目	年令					計
	~39	40~49	50~59	60~69	70~	
正 常	42 79.2	66 74.2	104 68.9	60 58.8	6 35.3	278 67.2
心筋硬塞	0	0	0	2 1.9	1 5.9	3 0.7
冠不全	0	2 2.3	6 4.1	2 1.9	1 5.9	11 2.8
左室肥大	0	3 3.3	8 5.3	9 8.8	2 11.8	22 5.5
右室肥大	0	1 1.1	4 2.6	1 1.0	0	6 1.6
心筋障害	7 13.2	14 15.7	19 12.6	16 15.9	3 17.6	59 14.1
期外収縮	3 5.7	0	2 1.4	2 1.9	3 17.6	10 2.5
ブロック	1 1.9	1 1.1	8 5.3	9 8.8	1 5.5	20 4.9
W P W	0	2 2.3	0	0	0	2 0.5
心房細動	0	0	0	1 1.0	0	1 0.3
異常計	11 20.8	23 25.8	47 31.3	42 41.2	11 64.7	134 32.8

註. 上段字は例数を表わす

被検者数 408 名

図2. b 年令別最高血圧分布

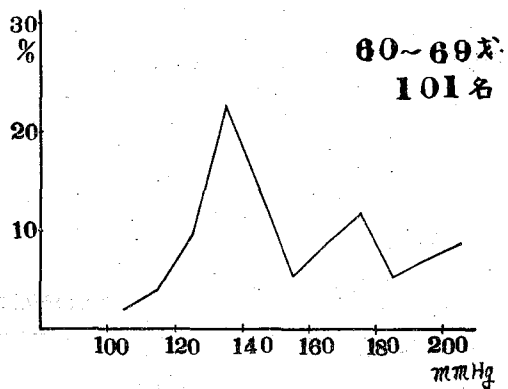
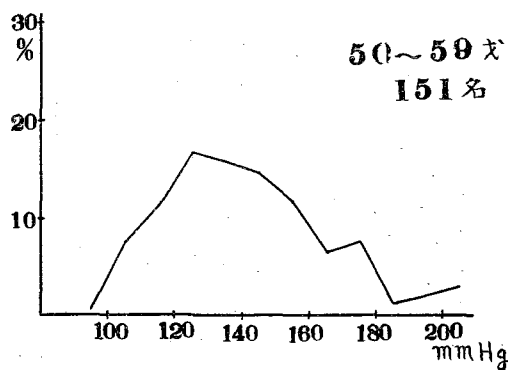
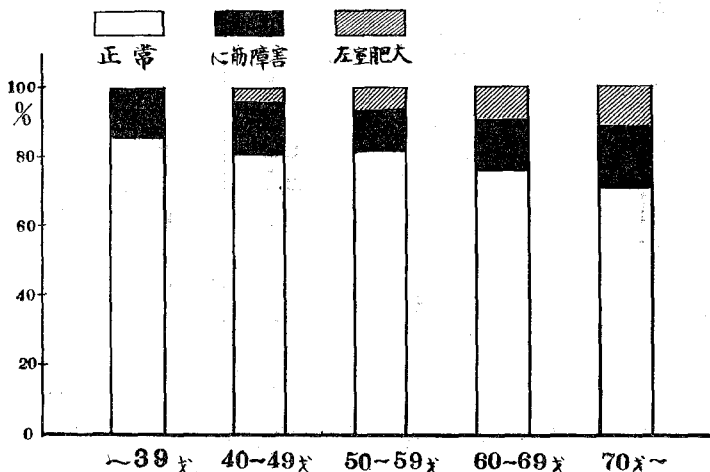


図3 左心室肥大・心筋障害の年令的分布



第4表 心臓及び血管系レ線像の分類 (百分率)

所見	年令					計
	39以下	40~49	50~59	60~69	70~	
正常	42 79.2	54 60.6	71 42.5	40 36.7	3 20.0	210 48.5
心拡大	6 11.4	22 24.8	47 28.2	31 28.4	8 53.3	114 26.3
動脈硬化	4 7.6	12 13.5	40 23.9	31 28.4	4 26.7	91 21.0
大動脈瘤	0	1 1.1	9 5.4	3 2.8	0	13 3.0
滴状心	1 1.8	0	0	1 0.9	0	2 0.5
大動脈中膜炎	0	0	0	3 2.8	0	3 0.7
異常(計)	11 20.8	35 39.4	96 57.5	69 63.3	12 80.0	223 51.5
例数	53	89	167	109	15	433

註. 上段字は例数を表わす

第5表 眼底 Keith-Wagener の分類

分類	年令					計
	~39	40~49	50~59	60~69	70~	
総数	53 名	89 名	151 名	101 名	14 名	408 名
0	51 96.2	60 67.4	66 43.7	24 23.8	6 42.9	207 50.8
I	0	12 13.6	36 23.8	23 22.8	1 7.1	72 17.6
II	2 3.8	16 18.0	48 31.8	50 49.5	7 50.0	123 30.1
III	0	1 11.2	1 0.7	3 2.9	0	5 1.2
IV	0	0	0	1 1.0	0	1 0.3

註. 上段字は例数を表わす (百分率)

d. ツベルクリン反応

各年代共陽性のものは80%以上でほとんどが自然陽転でありBCG接種陽転は僅かにみられたのみである。

4. 消化器系

消化管レ線像, 胃液検査及び検便について検討した。

a. 消化管レ線像

全例435例中異常216例(49.7%)で大半のものが何等かの消化器系疾患を有しており, その中最も多いものが胃炎及び腸癒着症で各6例(13.9%), ついで胃下垂41例(9.5%), 移動性盲腸12例(2.8%)あり, 胃, 十二指腸潰瘍16例(3.9%)を認めた。その他はいつでも第7表の如く低率であった。これらを年令別にみると胃炎が40才代19例(20.0%), 70才代3例(21.5%)で他の年令に比べ高率をしめしている。胃, 十二指腸潰瘍は50才代及びそれ以下に多く50才代7例(4.3%)となっている。又胃下垂は年令と共に増加している。なお50才代及び70才代に胃癌4例を認めた。

症6.7%でこれらはいづれも各年代にみられたが特に硬化型肺結核症及び肋膜癒着は70代に多くいづれも14.3%をしめしている。又肺気腫は70代では7.1%であるが他の年代ではほとんどみられない。その他第6表のごとく特別な変化はみられなかった。

b. 肺活量

肺活量 2000ml 以上のものが大部分で2000ml 以下のものは70才代に50%みられた他, 各年代共著明な変化は認められなかった。

c. 喀痰検査

主として塗抹及び培養にて結核菌検出を試みたが陽性のものは全例中3例0.7%であった。

第6表 胸部レ線像の疾患別分類

年 令		39才以下%	40代 %	50代 %	60代 %	70才以上%	計 %
肺 結 核 症	浸潤乾酪	3 5.7	6 6.7	9 5.6	10 9.7	0	28 6.7
	線維乾酪	1 1.9	3 3.3	3 1.9	3 2.9	0	10 2.4
	硬化型	4 7.5	10 11.1	18 11.3	8 7.8	2 14.3	42 10
	結核腫	0	0	0	0	0	0
肋膜 癆痕	肋膜癒着	4 7.5	4 4.5	14 8.7	10 9.7	2 14.3	34 8.1
	肋膜肥厚	0	1 1.1	4 2.5	3 2.9	1 7.1	9 2.2
石 灰 沈 着		1 1.9	1 1.1	3 1.9	1 0.9	0	6 1.4
其 の 他 の 肺 疾 患	肺 気 腫	0	0	1 0.6	0	1 7.1	2 0.5
	矽 肺	0	0	1 0.6	0	0	1 0.2
	慢性気管支炎	0	0	0	1 0.9	0	1 0.2
	肺 う つ 血	0	0	3 1.9	2 1.9	0	5 1.2
異 常 な し		40 75.5	64 71.1	104 65.0	65 63.0	8 57.2	281 66.9

註. 上段字は例数を表わす

被検者数 408 名

## b. 胃液検査

第8表に示すごとく低酸のものは各年代共非常に多く全例の48%をしめしているが40才代38例(42.8%), 50才代74例(49.0%), 60才代53例(52.5%) 70才代9例(64.5%)で明らかに年令と共に増加している。過酸をしめすものは39才以下では24.5%, 50才代で20.5%, その他の年代ではいずれもそれ以下である。無酸は比較的少く40才代2例(2.5%) 50才代6例(4.0%) 60才代5例(4.8%) 70才代1例(7.0%)であるが年令増加と共に高くなっている。

## c. 検便

潜血食のもとに検査を行つたもので被検者408名中潜血反応陽性のもの23例であり、この中強陽性をしめたものは10例であるが特に年令の差異は認められなかつた。

寄生虫卵;塗抹,集卵法にて検査を行つた所,回虫卵13例で肝ダストマ9例,東洋毛様線虫卵5例,十二指腸虫卵1例,横川吸虫卵2例,計30例に虫卵を認めた。

## 5. 肝,胆嚢,胆道系

## a. 肝機能

B.S.P., 高田氏反応, モイレングラハト, 総血清蛋白, A/G比, 硫酸亜鉛試験, 総コレステロール, ビリルビン, 磷脂質についての検査を施行した。B.S.P.は45

分で5%以内を正常としたが施行例387例中異常をしめすもの110例で27.1%, その中50才代11.1%, ついで60才代7.5%となつている。この異常例中B.S.P.10%以上のものは30才代5例(9.4%), 40才代8例(8.9%)であり50才代20例(13.2%), 60才代15例(14.8%), 70才代5例(35.7%)であり20%以上のものは40才及び50才代で5例(2.1%), 30%以上のものは50才及び60才代で5例(1.9%)となつている。従つて高度の肝排泄障害を示すものは全例の2.6%である。高田氏反応は24時間で3本以上陽性を異常としたがこれは327例中127例(34%)に認め, モイレングラハトは8以内を正常としたが406例中32例(7.9%), に異常を認めた。総血清蛋白は年令と共に減少, A/G比は1.5以下のものは406例中137例(33.8%), 2.4以上のものは16例(3.9%)となつている。硫酸亜鉛法は12単位以上を異常とし406例中66例(16.3%)に異常を認めた。総コレステロール値は241mg/dl以上のものは406例中88例(21.7%)で年令別にみると年令増加と共に高率をしめし50才代で45例(29.8%), 60才代39例(38.7%)となつている。ビリルビン量は0.8mg/dl以上のものは406例中34.0%, 磷脂質は12mg/dl以上のものは33.0%であるが年令の差異は認められない。以上の総成績からみて高度肝障害のみられたものは全例中8例に(1.7%)過ぎない。

十二指腸液検査にて胆砂及び虫卵の検出率は40才代、50才代に比較的高く夫々11.3%及び10.0%で又、細菌検出率は40才代16.8%, 50才代19.2%, 60才代26.7%と年令と共に可成り高率に認められた。これらのことより老人

第7表 消化管レ線像

疾患名	(百分率)					計
	39才以下	40才代	50才代	60才代	70才代	
異常なし	32 59.2	51 53.6	78 48.1	52 47.7	6 42.9	219 50.3
胃炎	5 9.4	19 20.0	19 11.6	14 12.9	3 21.5	60 13.9
胃潰瘍	2 3.7	1 1.0	4 2.5	2 1.8	0	9 2.2
十二指腸潰瘍	0	2 2.1	3 1.8	2 1.8	0	7 1.7
胃癌	0	0	3 1.8	0	1 7.2	4 0.9
胃下垂	4 7.4	5 5.5	17 10.4	13 12.1	2 14.2	41 9.5
胃憩室	0	0	1 0.6	0	0	1 0.2
十二指腸憩室	0	0	2 1.2	1 0.9	2 14.2	5 1.3
腸管癒着	6 11.2	10 10.6	29 17.8	16 14.7	0	61 13.9
移動性盲腸	1 1.8	3 3.2	5 3.0	3 2.7	0	12 2.8
結腸下垂	0	0	1 0.6	3 2.7	0	4 0.9
直腸癌	0	0	0	0	0	0
その他	4 7.3	4 4.0	1 0.6	3 2.7	0	12 2.8
異常計	22 40.8	44 46.4	85 51.9	57 52.3	8 57.1	216 49.7

註. 上段字は例数を表わす

第8表 胃液検査 (百分率)

年令	程度	酸度				潜血		乳酸		人数
		無酸	低酸	正酸	過酸	+	-	+	-	
~39		0	22	18	13	23	30	0	53	53
		0	41.5	34.0	24.5	43.4	56.6	0	100	
40~49		2	38	34	15	40	49	3	86	89
		2.5	42.8	38.2	16.5	45.0	55.0	3.7	96.3	
50~59		6	74	40	31	59	92	3	148	151
		4.0	49.0	26.5	20.5	39.0	61.0	1.9	98.1	
60~69		5	53	27	16	42	59	1	100	101
		4.8	52.5	26.7	16.0	41.5	58.5	1.0	99.0	
70~		1	9	3	1	6	8	1	13	14
		7.0	64.5	21.4	7.1	43.0	57.0	7.0	93.0	
計		14 3.4	196 48.0	122 24.8	76 23.8	170 24.0	237 76.0	8 1.5	400 98.5	408

註. 上段字は例数を表わす

性の胆嚢、胆道系疾患は相当多いものと思われる。

6. 血液所見

検査項目は血色素量、赤血球数、色素指数、血小板、ヘマトクリット値、白血球数で検査成績は図5 a. b. にしめすごとくである。血色素量85~109%のものが大部分をしめ女子では若年者に軽度の貧血をしめすものは10.0%に認められた。全例では74%以下のものは3.0%, 110%以上のものが7.9%にみられた。赤血球数は420~549×10<sup>4</sup>のものが多く全例の63%, 369×10<sup>4</sup>以下は8.6%, 550×10<sup>4</sup>以上のものは1.0%ある。色素指数については0.9~1.09のもの52.5%, 1.10以上のもの37.5%, 0.9以下10.0%となっており、比較的若年者に貧血傾向がみられた。血小板数10万以下は408例中8.6%, 15~25万は196例(48%), 10~15万は128例(31%)となっている。

ヘマトクリット値40~45%が最高で147例(36%), 46~50%が124例(30.4%)でこれは年令増加につれて低率をしめしている。

白血球数については5000~7000が大半をしめ、7000~9000は408例中112例(27.5%)となっている。以上の成績から血液所見には著変はなかつた。

7. 代謝異常

血糖検査408例につき坂口食による糖負荷試験を行つた。測定方法はSomogyi法で行い検査成績は空腹時血糖121mg/dl以上のもの15.5%, 血糖2時間、3時間値共135mg/dl以上のものは40才代16.9%, 50才代20%, 60才代17.8%で40才以上に比較的高率に糖尿病と診断されたものがある。

8. 神経系

うつ病の多いことで50才代に16.6%あり、30才、40才代には軽度のうつ状態のものが30.3%でかなり高率である。此等は種々の社会的因子及び脳動脈硬化症などの身体的因子が関与するものと思われる。

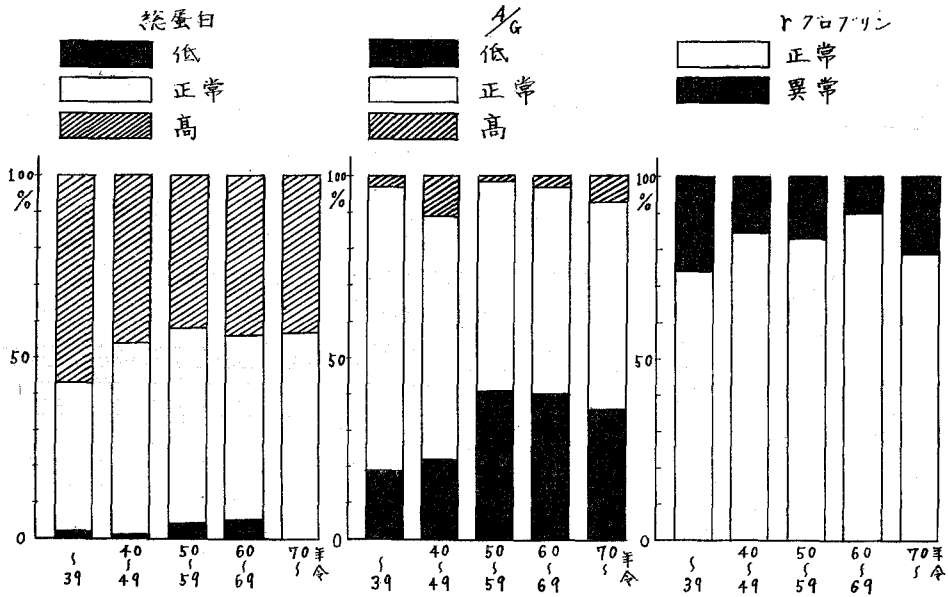


図4.a 血清検査成績 其の一

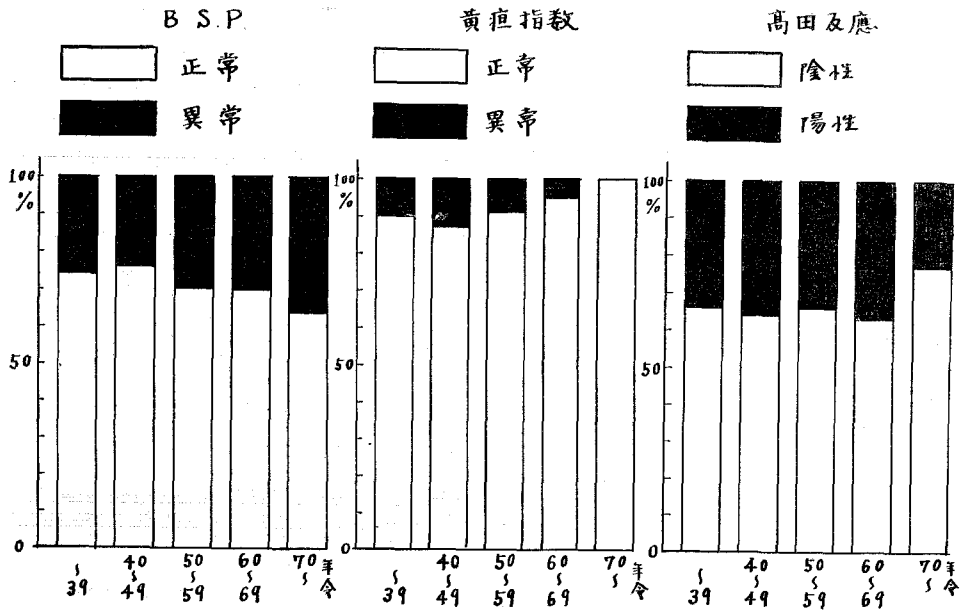


図4.b 血清検査成績 其の二

9. 各種疾患

第9表に示すごとく老年期に特有ともいふべき疾患、いわゆる退行性病変に起因するものが多く、変形性脊椎症23.5%、骨棘鬆症5.2%、老人性難聴15%、老人性白内障21.3%、子宮萎縮40.7%、前立腺肥大13.3%などが当然年令と共に増加している。若年者にもみられるが年令の増加と共に比較的多いものは腎下垂、遊走腎11.3%、子宮腔部糜爛10%、痔核16%である。

VI 総括

人間ドックという比較的限定された枠の中で種々の検査を行つたもので、その成績は被検者の生活環境が比較的近似的のものが多い為この因子による影響が多くみられた。又その大部分は50才、60才代の老年期にあるものが多いのでそれらの検査成績を40才代以下のものと比較検討した。

循環器系では血圧、心電図、心及び血管レ線像などに

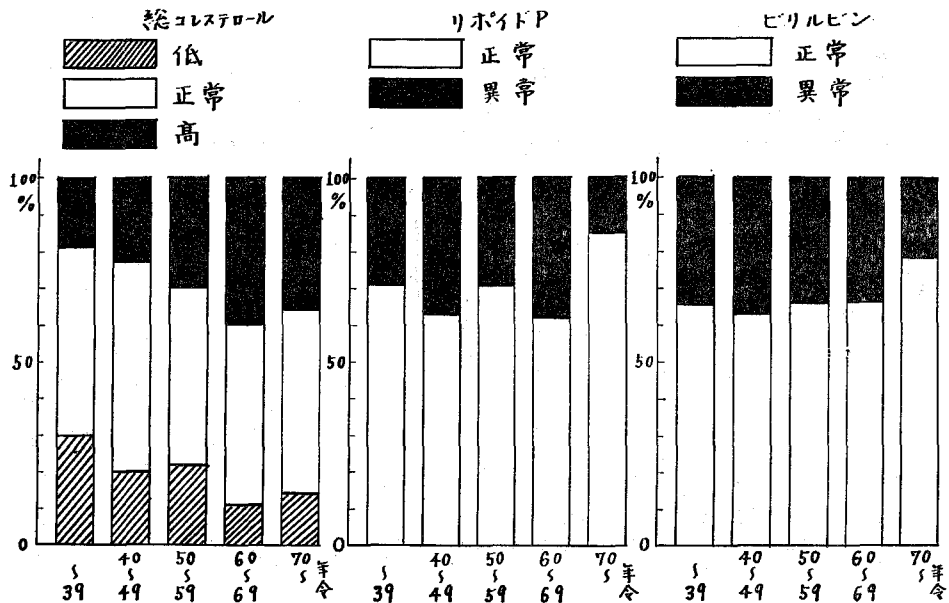


図4.c 血清検査成績 其の三

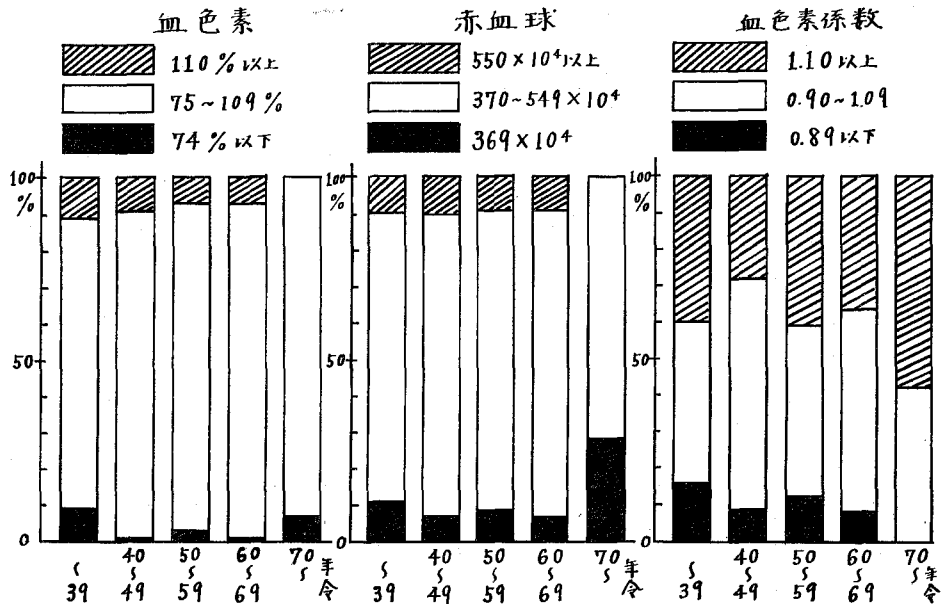


図5.a 血液像の分類 其の一

年齢と共に増加する異常例を認めた。特に老年期においては高血圧、左室肥大、心拡大、眼底動脈硬化などの変化が40才代を境として年齢と共に増加している。なお血清コレステロール値も年齢と共に増加し60才代では特に高率をしめしている。これら一連の成績をみるといづれも年齢の増加と共に年齢的变化を認めるのは老人性変化と考えるとよいであろう。

腎機能については従来より一般に年齢増加につれて機能低下をしめすものとされているが、われわれの行った

検査成績の範囲では著しい機能低下をしめしたものはほとんどなく、軽度の低下を認めたのみである。すなわちこれは最近の諸家の報告と同様の傾向をしめしている。呼吸器系ではいわゆる老人に多いといわれる肺気腫、慢性気管支炎は比較的少く、我々の統計ではむしろ結核性病変が多くみられた。しかし現在進行性のは皆無であつた。尼子の報告では肺結核は老年者主要死因の第3位をしめしており Peller, Osler などは老人病の20~25%に老人性結核の存在を認めている。



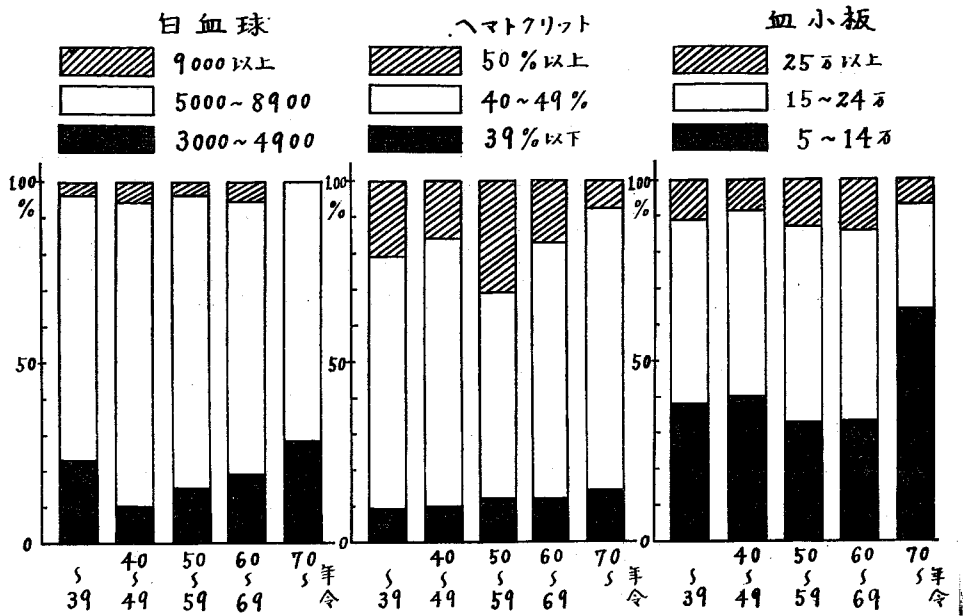


図5.b 血液像の分類 其の二

消化器系：高令になるに従い胃下垂が多く認められた。尼子は被検者の100例中41例，松本は被検者65例中51例に下垂を認めている。胃液酸度では低酸のものが最も多くこれは60才代では50%以上をしめ70才以上では更に高率であった。尼子によれば60才以上の老年者215例中70%に減酸を認めている。無酸は年令と共に多いといわれているが我々の成績も同様で年令増加と共に正酸，過酸を示すものが減少し低酸，無酸に傾く傾向が明らかに認められた。

肝機能と年令との関係については種々の報告があるが一般に機能は年令と共に低下をしめすといわれている。我々の成績では50才，60才に高度の肝機能障害を認めたものが数例あった。

十二指腸液検査では老年者に細菌，胆砂及び虫卵の検出率が高度で老年者の胆石症及び胆嚢疾患の潜在が考えられた。

血液所見：老人の血液所見に関しては多くの報告があるが一般には軽度の貧血をきたすものが多いとされており最近，森田の報告によれば明らかに赤血球数，白血球数及び血色素量の減少を認めている。我々の成績でも軽度の貧血を認めた。

代謝異常：主として糖代謝について行つたが40才代以

上に比較的高率に糖尿病を認めた。

神経系：軽度のうつ状態をしめすものが非常に多かったのは社会的因子が大いに関与しているものと思われる。

MCR陽性者は408例中5例あつたがその中1例は消化管レ線像で胃癌を認め，1例は退院数カ月後乳癌で死亡している。

以上我々の検査成績からみても老人性変化は40才代よりはじまり50才，60才代で著明となり，いわゆる老人病の出現は50才後半より60才代にかけて多くみられた。

本稿の概要は昭和34年11月第1回老年学会総会において発表した。

参考文献

- 1) 緒方知三郎，他：老年病学 2 111 (昭31)
- 2) 小山善之，他：日内会誌 44 76 (昭30)
- 3) 小山善之，他：老年病 1 225 (昭32)
- 4) 尼子富士郎：日消会誌 34 207 (昭10)
- 5) 五島雄一郎：老年病 3 23 (昭34)
- 6) 中山光重，他：診断と治療 47 868 (昭34)
- 7) 広沢弘七郎，他：診断と治療 47 849 (昭34)
- 8) 田坂定孝，他：日本臨床 17 737 (昭34)

第9表 ドック入院患者の各科別疾患名

科別	項目	年令					計
		20~39	40~49	50~59	60~69	70~	
		53	89	151	101	14	408
外科	痔核	24.5% 13	13.5% 12	18.5% 28	12.8% 13	0	16.2% 66
	脱肛	0	1.1% 1	1.3% 2	0.9% 1	0	0.9% 4
	ヘルニヤ	0	1.1% 1	1.3% 2	0.9% 1	0	0.9% 4
	大腿静脈瘤	0	1.1% 1	0.7% 1	0	0	0.5% 2
整形外科	変形性脊椎症	3.7% 2	16.8% 15	29.1% 44	28.7% 29	42.8% 6	23.0% 96
	骨疎鬆症	0	3.4% 3	6.0% 9	9.9% 10	28.5% 4	6.4% 26
	関節リウマチ	0	0	0	1.0% 1	0	0.2% 1
	変形性関節炎	0	0	1.3% 2	3.0% 3	7.1% 1	1.4% 6
泌尿器科	遊走腎	11.3% 6	6.7% 6	6.6% 10	5.9% 6	0%	6.3% 28
	腎下垂症	3.7% 2	3.4% 3	3.3% 5	5.0% 5	21.4% 3	4.4% 18
	前立腺肥大症	1.9% 1	7.9% 7	9.2% 14	18.8% 19	21.4% 3	10.8% 44
眼科	老人性白内障	1.9% 1	15.7% 14	23.8% 36	37.6% 38	35.7% 5	23.4% 94
	緑内障	0	0%	0.7% 1	0%	0%	0.2% 1
	乱視	3.7% 2	3.4% 3	6.0% 9	2.0% 2	14.3% 2	4.4% 18
	黄斑変性	5.7% 3	7.9% 7	9.9% 15	5.9% 6	0%	7.6% 31
耳鼻科	老人性難聴	0	4.5% 4	13.9% 21	28.7% 29	17.1% 8	15.2% 62
	咽頭喉頭炎	32.1% 17	21.3% 19	25.8% 39	24.8% 25	0	24.5% 100
	副鼻腔炎	15.1% 8	18.0% 16	12.6% 19	9.9% 10	21.4% 3	13.7% 56
	神経性難聴	7.5% 4	4.5% 4	2.0% 3	2.0% 2	0	3.2% 13
皮膚科	白癬	15.1% 8	24.7% 22	15.8% 24	16.8% 17	7.1% 1	17.6% 72
	毛細管拡張症	3.7% 2	2.2% 2	4.0% 6	5.0% 5	0	3.7% 15
	湿疹	5.7% 3	11.2% 10	12.6% 9	8.9% 9	14.3% 2	10.5% 43
	苔癬	1.9% 1	2.2% 2	4.6% 7	1.0% 1	7.1% 1	0.3% 12
婦人科	子宮萎縮	5.8% 1	26.7% 4	45.9% 17	73.6% 14	33.3% 1	40.7% 37
	子宮腔部糜爛	0	20.0% 3	8.1% 3	15.8% 3	0	9.9% 9
	子宮筋腫	5.8% 1	6.7% 1	2.7% 1	0	0	3.3% 3
	(受診者数)	(17)	(15)	(37)	(19)	(3)	(91)
精神科	うつ病	37.8% 20	30.3% 27	19.2% 29	5.9% 6	21.4% 3	20.8% 85
	うつ病	18.8% 10	10.1% 9	16.6% 25	3.0% 3	0	11.5% 47

註. 右列字は例数を表わす